

人文会ニュース

1989. 6

消費税に照射された業界の体質

.....小林一博 1

人文書講座XVII

フランス革命200年.....松浦義弘 15

他業界の教育を受けて

.....旭屋書店営業部本店 隅山泰助 29

会長退任のご挨拶.....中平千三郎 36

55

業務用

法政大学出版局

都市・階級・権力

カステル／石川淳志監訳 政策論と都市社会運動論の両面から、包括的都市社会学を構想する著者の主著。2575円(税込)

ドイツ文学の社会史 上下

ベルク、他／山本・三島・保坂・鈴木訳 文学の発展を社会・経済・政治との相互関連において考察する。各5800円(税抜)

古代ギリシア人

フィンレー／山形和美訳 歴史と文明の諸相を探索し、偉大な遺産の営為とその絶えざる光芒をえがく。2400円(税抜)

生物学にランダムウォーク

バーク／寺本・佐藤訳 統計物理学の概念を通して、生きた系のダイナミクスとその研究方法を教える。1600円(税抜)

雑誌 哲学 39号

日本哲学会編 シンポジウム・認識論と認知科学—黒崎政男・他。1200円(税抜)

東京都千代田区富士見2 ☎03-237-1731

近代劇の始祖、イブセンのノルウェー語
原典による初めての完全版全集刊行!

原典によるイブセン戯曲全集

原 千代海 個人訳

全5巻

(内容見本進呈)

第一回配本 第4巻

定価5974円

菊判上製貼函入・四八〇頁(本体5800円・税174円)

*収録作品—人形の家、幽霊、人民の敵、

野鴨、ロスメルスホルム

未来社

東京都文京区小石川3-7
電話(814)5521 振東7-87385

ライフサイクル、その完結

エリクソン 高い評価を得てきた人間の発達段階論をさらに深化。エリクソンの仕事の集大成。村瀬・近藤訳。三冊円

学問とジャーナリズムの間

杉山光信 知識人論 国際化・ナショナリズム論等、80年代の政治・思想状況に対する社会学者としての発言。二冊円

エロシエンコの都市物語

藤井省三 盲目の青年時人が一九二〇年代初頭の東京・上海・北京を疾走する。その軌跡を追う文学的社會史。二六〇円

ルネサンス研究

下村寅太郎著作集 4
ルネサンスの芸術家とは何であったか。ブルクハルト以後百
年の研究成果をふまえた著者の精神的アプローチ。五二〇円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

都市民俗学へのいざない

I◎混沌と生成 II◎情念と宇宙

*岩本通弥+倉石忠彦+小林忠雄編 (IIは6月5日発売)

定価各二五〇〇円(税込)

目眩めく喧噪と

猥雑さの渦巻く都市の深層から

今、新しい神話が誕生する

雄山閣

東京都千代田区富士見2/振替東京3-1685

消費税に照射された業界の体質

小林 一博

最悪の税制

消費税実施から一カ月。政府やマスコミは、混乱もなく転嫁もスムーズだといっている。書店の店頭でも大きなトラブルはない、といっているが、実際は違うのではないか。

書店の店頭で混乱やトラブルがない、のが事実であっても、それは、読者が消費税を納得しているからではない。怒りを書店に向けていないだけで、内に籠った不満は大きい。

税制改革、消費税導入で得るのは、国民の5%ほど

の高額所得層という。九五%は程度の差があっても消費税の被害者になるわけで、こちらの方は実感がある。五月一日付朝日新聞でも、増税感をもつ人が七二%と出ているほどだ。便乗値上げも「かなりある」が三四%、一部にあるが四四%、ほとんどないと答えた人は一%にすぎない。

政府は「税は広く薄く」といっているが、本来、税のあるべき姿は「公正」であることに尽きる。公正感のない税制など、いかに説明しようと、それは詭弁といっている。

消費税はもともと税制度そのものに欠陥があつて、それは政府も認めていたのに、消費税を無理矢理に押し込むために、悪徳業者のズルさにも目をつむることになり、悪税の程度が一層大きくなってしまった。

こんな税制が実施されたのに、労働組合は税制反対ストも打たず、学生は春のコンパにうつつを抜かしている。夏の参院選・都議選で一矢報いるとはいっているが、どんな矢になることか、と思う。

金融機関の窓口には「一円玉がありません」とお詫びの貼り紙がしてある。これなども円単位の端数は四捨五入しなさいと奨励していることと同じではないか。街には、こんな目に会ふのなら、もっと反対して潰せばよかったとの声があるが、ぜひそのボヤキを怒りに点火してほしい。

さらけ出した体質

ところで、消費税導入以前からの業界の状況をみていて感じたことが三つある。同時に消費税によってあらためて照射された課題もいくつか浮彫になった。

まず、三つの感想から。第一は、出版業界のまとめ

の悪さ。前々から指摘されていた三位一体の空想が、消費税によって完全に崩れた感じである。建前にしていた「仲良し」はどこかに消えてしまつて、エゴがむき出しになつて、本音の部分をさらけ出してしまつた。今後どんな形で修復をはかるのか、見守りたい。

第二は、多くの出版社をはじめとして、業界関係者の流通に対する冷たさである。無理解がこれほどとは思わなかつた。出版社の営業マンは、かなり書店を歩いて、書店事情には精通していると思つていたが、どうもそうでなかつたようだ。小・零細規模の経営の実態、店頭の現状を熟知していれば、今回の発言や対応はかなり違つていたと思う。

第三は、余りにもあなた任せの人が多かつたこと。売上税の時から数えれば、議論の時間はたつぷりあつた。消費税実施を仮定してのシミュレーションの機会も十分すぎるほどだった。真剣にシミュレーションをやつてみれば、消費税はダメだと早くから結論でき、反対の声は大きくまとまつたはずだ。

あなた任せは、書店の中にもあつた。先日こんな話をきいた。日書連は消費税反対を唱え、組合員にはカン

パを求めたのに、消費税は実施されたではないか。幹部はその責任をどうとるつもりなのか。こんな人もいる。

また、書店人も小出版社の実態を知らない人が多い。

出版社や、取次関係者の中にも似たような考えの人がいるのではないか。

あなた任せの風潮は出版業界がとくに際立っているわけではない。しかし、「言論・表現」を飯の種にしている職業人の集団なのだから、あなた任せでなく、積極的に発言し、行動すべきではなかったか、と思う。

出版社の経営者にもみられるが、取次・書店には「政治嫌い」が多い。日書連が決起大会を開催したり、国会に陳情したりすることに対する批判の声もきく。商売人は政治などにかかわるべきでない、というのは、一見、商人としての「正論」であるかにきこえる。

しかし、消費税問題のような場合、政治的行動だと非難していいものだろうか。税は生活そのものであり、経営に密接しているものではないか。自分の首を大きな権力が締めようとしているのに「政治は嫌いだ」などというていられるのか。ところが、消費税に関しては、中曾根・竹下リクルート政権に押しきられてしまった。

流通問題への注目を

消費税問題を通じて、浮彫りにされたことが三つある。「感想」と重なる部分があるが、第一は、出版物の流通とは何か、である。これには出版社のもつ価格設定権、業界の将来を展望する時の取次・書店の経営動向などが含まれる。

正味一%要求が出た時、在庫品販売分に対する調整金問題が浮上した時、それが発端になって書店経営や、価格問題などを考える方向に展開する機会にしてほしいと思った。

書店経営でいえば、年商六千万円以下の書店の営業利益率は〇・三六%、経常利益率は〇・〇一%（「書店経営指標・昭和六三年版」）である。売上げが六千万円で、利益が六千万円ということである。これは実質赤字以外のなものでもない。

例えば、人文会会員社の取引先書店は比較的売上げ規模も大きく、年商六千万円以下は少ないだろうと思う。取引先書店数も二万六千件は必要でないだろう。日書連加盟の一万三千件も必要でない。取引もない書店の経営などに責任など持つ必要はない、というかも知れない。

しかし、村の小さな書店経営や書店員の生活にも思いを向けることが、“文化”ではないか。

直接関係がない者にまで配慮など必要はないと言い切るものか。

今期春闘のベースアップ額をみても、平均二万数千円の大手があり、一方に一万円に届かない社も少なくない。書店や取次の経営を圧迫している最大要因は、出版物平均価格の抑制にある、と指摘は多い。そして平均価格を低くしている最大原因は、一部の大手出版社の価格政策である。最近はその一部大手出版社を具体的に名指しする人も出てきた。

価格を抑えることは、読者への最大のサービスだと信じている人たちに、価格政策の転換を持ち込んでも通じまい。価格はいまのままでも、十分に利益が出て、社員にも高給で待遇しているのだからこれでいい、というだろう。

しかし、平均定価、客単価が低目に安定してしまったことが、書店や取次の経営を困難にしている一因であることも否定しきれない。

消費税の問題を消費税対応の一点に終わらせず、価格

全体の在り方にも及ぼして検討してほしいと思う。

再販制の行方

第二点は再販問題である。一九七八年の公取委員長の再販見直し発言で揺れた業界は、再販に関しては“一件落着”の様子であった。だが、子細に業界状況をみると、出版社による再販制の運用は“柔軟さ”を増していたということができる。

そこにきて、消費税が加わった。本体を再販価格にして、外税方式をとるべきだという主張は無視できない。消費税導入後の混乱や今後を考えるなら、早目に再検討した方がいい。ただし、完全外税方式をとるためには、これに対応できない書店がある現実を十分に考慮する必要がある。

再販制をもち、価格決定権を専有する出版社は、書店の経営に対して配慮が必要であり、外税方式をとるのなら、そのために説得をしなければならない。そうでないと再販制が潰れてしまう。

少数の例かも知れないが、在庫品に外税をかけて、端数が出たらその分を値引きしている書店があったという。

内税になってゐる雑誌に三%課税されたとの事例も報道されている。

再販制の運用が一部ではあるが、かなり柔軟になってきているところだけに、外税方式をとる時は、その実施が気になるところである。

敗戦後、一時地方定価制が実施された。この時も随分乱れていた。そんなことがありながら、本の定価販売制度は今日まで維持されてきた。でも、今後のことはわからない。相当、意識して再販制度の維持に努力していかなければ、混乱する可能性が出てきた。

消費税を廃止に追い込めば、めでたし・めでたしだが、消費税が存続することになれば再販制の運用は不安状態

になるだろう。ここでもう一度、外税・内税の議論をしてもいいのではないか。外税を採用した場合、書店の店頭（それも小規模の）が対応できるのか、できないのか、対応する方法はないかなど、冷静になって協議してもいいのではないか。

まず、最初に結論を出してしまつて主張し合つたのは、何事も解決できない。

“政治”が嫌いな人も

第三点目は繰り返すことになるが、政治問題である。“政治的な運動をすべきでない”という根底には“オカミに逆らつてはならない”という気持ちがあると思う。

歌舞伎の〈いのち〉——バロックの美を追求する未踏の論考！

歌舞伎美論 河竹登志夫

A5判上製カバー装・バ〇頁●定価三五〇〇円

歌舞伎のもつ独自の表現様式やドラマの美を、世界演劇のなかに位置づける著者多年の研究の精華。
花道の劇的機能 道行のロマンを追ひ、日本人の悲劇観を明らかにする。
(かわたけとしお氏は、早稲田大学教授)

東京大学出版会

〒113 東京都文京区本郷7 (東大構内)
☎03-811-8814 振替東京6-59964

これまで、オカミに逆らえば、必ずお返しをされた。しかし、いつまでも牙を抜かれたままでいいのだろうか。

正直いって、私自身、政治的な発言や行動は苦手である。でも身にかかってくる火の粉くらいは自分の手で払いたい。

本来、政治とは雲の上でおこなわれるものではない。国民の暮らし向き、内容を改善し、豊かにし、将来への明るい展望を国民一人一人に保障するものだろう。

権力の座にある者の恣意に任せていたら再びリクルート事件が起きる。政治を委任するに値しない政治家しかいないなら、その首を選挙ですげかえることもためらってはいられない。

『政治』が好きでない人も、消費税廃止の行動には何らかの形で参加しませんか、と呼びかけたい。どうしても行動に参加できないなら、せめて足を引っ張ることはよして下さい、といいたい。中曽根信筆者でなかったら、大部分の国民を困らせ、出版業界の混乱に火を注ぐ消費税は廃止する、ということではないか。

混乱は実務面に集中

さて、消費税実施から一カ月を過ぎたところでは、出版社・取次・書店それぞれ戸惑い不満を募らせているようである。

書店の話によれば、実務面の事務処理量からみて、売上げが五・六%以上、一〇%近く上昇しないと費用を吸収できないのではないかという。レジ処理もさることながら、店を閉めた後の事務処理が大変だということである。定価を大幅に改訂したいのは専門書出版社も同様ではないか。マスマガジンをもつ出版社は、昨年秋季頃から定価改訂を事前に実施したり、広告増収に努力したりしてきた例がある。専門書は現在でもすでに価格が頭打ちとなっていて、これ以上上げると客離れを起こすと心配顔が多い。

大手出版社・広告収入のある出版社は低価格政策をとっても十分利益を出し、中小規模の専門出版社は、定価付けもままならないできたところに、消費税の実施によって、矛盾は一挙に拡大された。

在庫の問題はもっと大きい。六カ月間は外税徴収でスタートしたが、六カ月終わったらどうなるのか。出版社

はこの六カ月間で定価表示の切替えができるだろうか。出来なければどうするか。いますぐ協議をはじめても間に合わないと思うのに。それとも、どこかで協議がおこなわれているのだろうか。

出版社の中には、消費税法案が国会を通過する前から、実施を前提に準備をしていたところがあった。それでも時間が足りなかったと告白している。多くの出版社は、おそらく年末からの準備だったと思われる。実質三カ月しか準備期間がなく、その間にも業界団体の協議が難航して方針が揺れ動いた。

その準備不足は、今のところ取次集中しているといっている。

取次には、新刊、在庫品、旧定価本が入り混って入荷している。返品も本体価格での起票を要請していたが、これも実行されていないようである。混乱は予想を上回り、検品のために要員の増強でしのいでいる。

起票の混乱は人手不足の小規模書店だけでなく、大手書店でも、パートや外商部門で乱れているという。取次は出版社に対しても、本体価格を大きく表示してほしい、といったのにこれも守られていない。

十月からは税込み価格で起票となり、送返品がおこなわれることが予想される。そこでまた混乱は大きくなりそうである。

取次全体では、一年間で事務増加分と、金利負担増が一〇億円以上との試算がある。取次の経営状態からみて、この負担に耐え切れない社も出るのではないかと心配である。取次が、返品処理と事務量増大で費用が過負担となり、経営が圧迫された時、出版社側に援助策はあるのだろうか。今、そんなことを取次側から言い出せば、一蹴されるにきまっているが、放置はできない問題であり、いまは棚上げになっている調整金、迷惑料要求が再燃することは避けられそうにない。

調整金（迷惑料、協力金）の総額は数十億円との試算である。

これまでのところ、雑誌は三%の上のせが実施されている。書籍も個々には三%を上をせしているが、低価格本の販売比率が上昇すれば、加重平均定価は前年比横並び、あるいはダウンもありうる。少なくとも半年は実施状況をみると、わからないというところのようだ。

政局は流動化

四月二五日、竹下氏が退陣を表明した。その翌日には竹下事務所の青木氏が自殺した。その間、自民党は予算案の単独審議を開始、採決を強行し、衆院を通過させてしまった。四月はまさに「残酷な季節」で、今後の展開は全く不透明である。僅かな期待は、学生が動かず、労働組合も行動しなかったのに、世論のうねりが竹下退陣に追い込んだことだ。それだけ、リクルート事件と消費税実施への反対・怒りが強いわけである。

ここまできても、出版業界は消費税廃止に起てないのだろうか。

日書連は、四月の定例理事会で消費税廃止を決め、連休明けには書協・雑協・取協に共同行動の申入れをする。取協は、書協・雑協次第だろうと思う。

一昨年、竹下内閣が発足してから、政府・自民党の各業界団体への協力要請と締め付けは凄まじいものであったという。団体幹部を勲章で釣る、粛清する。売上税反対運動で間隙ができた自民党と団体との調整を露骨に要求するなど、あらゆる手段を弄したらしい。

そんな自民党と出版業界団体とはどんな関係にあった

のか。何もなかったのか。いろいろ噂は流れているが……。おどろおどろした噂を打ち消すためにも、出版社団体は消費税廃止の世論を先導してほしいと思う。僅か二兆円の売上げの小規模業界団体であるが、もし結束することができて消費税廃止運動を主導できれば、効果は大きい。

消費税廃止へ向けて

先日、小稿の取材のため、ある人に消費税廃止をいうが、本当に廃止になった時の混乱はどう予測するのかと尋ねて、叱られた。

そんなことをいう人がいるから困るのだ、と。

仮に七月の参院選・都議選で自民党が大敗したとしよう。議会運営は混乱し、衆院解散が日程化するだろう。衆院選となれば、消費税廃止が提案される可能性はある。その場合、消費税廃止の時期は、早くても来年四月だろう。

もっとも、前述したように四月下旬において、政局の動向は予断を許さない状態で動いている。「人文会ニュース」が発行されるまでに予測を超える変化が起きても不

思議でないと思つてゐる。

話を戻すと、消費税の導入も混乱したが、廃止も混乱に輪をかけることになる。廃止運動をすすめながら、廃止の実施案を綿密に検討しておく必要がある。

導入のために六カ月準備しても十分でなかつた。廃止も六カ月以上の準備が必要となる。しかも、廃止と決まつた場合、客はその時点で消費税は払わないといひ出すにちがひない。小売業者の側も、欠損覚悟で消費税は頂きませんと言うだろう。

これが出版業界で起きたらどうなるか。昨秋、出版業界は公取委との折衝で、再販価格は税込み価格と決めてゐる。したがつて、小売業者が店頭で税を徴収しないことになつたら、再販崩し、再販違反になる。

廃止運動はそのことも念頭においてすすめてほしいと思ふ。

原稿料と消費税

去る二月、消費税について公認会計士の何人かに取材した。彼らが異口同音にいつたことは、消費税は一年後にはインボイス方式に変わり、税率も5%になる、であつ

た。

帳簿方式をとる消費税では、税の公正さを期待できないだけでなく、事務的にも困る。伝票方式をとつて税の転嫁が明確にされるのが、公認会計士たちには職務上も望ましいということであつた。

その時、原稿料のことも尋ねた。

年収三千万円以下であっても物書き専門の者は出版社に消費税分3%上のせを請求したほうがいいですよといつた。

だが、3%上のせをした出版社のあることをまだきいていない。これまで、二十年近く、新聞・雑誌に連載の仕事をしてきたが、原稿料は不変がほとんどである。春社員のベースアップの時、ベースアップ率とほぼ同率で原稿料を改訂してくれた社は共同通信社一社である。

共同通信社では八年間、毎週一〇〇〇字のコラムを書く機会をもらったが、八年間で原稿料は二二〇%増となつた。外にそんな例はない。

連載執筆は一種の無書式ではあるが、契約行為であると考える。したがつて、最初に決まつた原稿料が何年も変わらなくても仕方ないことなのだろう、と思ふことに

しているのである。というのは、書き手の側から原稿料のことを言い出したら、たいてい、連載を降ろされてしまうようである。冷たい社会なのである。

『定価は現状でいいのか』

ところで、なぜ、急に原稿料のことをいい出したかという、真の狙いは本の定価のことにある。

明治以来、日本の出版社は良書を安くを基本方針にしてきた。とくに、昭和初期の円本時代は、出版の大量普及を軌道に乗せたとされているが、これは同時に一挙に本の値段を引き下げた。

昭和初期、新聞購読料は一元（月ぎめ料金）。一九八九年四月は、消費税込三一九〇円。つまり三一九〇倍である。手元にたまたま、大正一三年刊の「哲学序論」（B6判・上製箱入・二九四ページ、中央出版社発行）があったが、定価二円である。三一九〇倍すれば六三八〇円になる。

でも、実際のところ、B6版上製箱入で、三〇〇ページ程度の人文書に六三八〇円の定価は付いていない。定価を抑えることによって読者はサービスを受ける。

だが、そのために小部数の専門書は利益率が悪化し、出版社の経営を圧迫する。

定価を抑えても部数が伸びれば解決できるが、定価を低めにしても、部数は大きく伸びない。その皺寄せは著者もともに受ける。

ベストセラー作家、評論家なら低価格で沢山読まれることを望むだろう。だが、それは一握りの人たち。本を書いても生産性は極めて低い。この状態は止むを得ないことなのだろうか。ぜひ討論してほしい。

本を飯の種にしている共通点を持ちながら格差が大きくなりすぎた。ポータス二〇〇万円の出版社がある、一方で小出版社の中には、社長含めて四人で人件費七〇万円という例もある。小規模書店の店員の待遇もこの小出版社と似たようなもの。

資本主義社会の中で生活している現在、貧富の差があることを愚痴っても、泣きごとでしかない。しかし不正が原因では困る。

消費税実施は、その点いろいろな問題をあらためて考え直し点検する機会となった。大きな犠牲を払いながらの勉強なのだから、消費税廃止運動とその後の出版業界

の構築は、勉強の成果を効果的に示すものでなければならぬと思う。

不公正を産む消費税

業界内の一部では、今後は消費税廃止運動でなく、消費税の公平、公正な運用と、他の品目の税率は上昇しても、出版物の消費税率は据置きとするように働きかけをしよう、方針転換の人も出ている。

消費税に関しては、いろいろな考え方の人がいても不思議でない。税はその人の収入、資産、所属する企業の規模、売上高、収益その他いろいろとかかわるものであるからである。税を身近に引き寄せて考えれば、税金、税制への対応も変わってくるだろう。その意味で、消費税に関連していろいろな議論が出ることは望ましいと考えているのである。

但し、次の二点については十分に考えた上での議論であってほしい。

一つは、今回の消費税は税の公正を壊すものであること。消費者から徴収した税を私腹に入れていいなどということは、不公正・不正の代表例である。そこまで小流

通業者に媚ななければならない税制が本当に必要なのか。

ヨーロッパ諸国では実施しているから日本でもという論理には全く馴染めない。ヨーロッパのいいところを真似していいことが一杯あるのに、なぜ、税制だけ真似なければならぬのか。

二つ目は、文化と税との関係について論議が欠落していたことである。

出版社の中には、文化的事業をやっていると、いくら鉄面皮でもいえない人もあっただろう。しかし、出版業界全体のことを考えれば、“文化”を主張することをためらうことはない。

なお、蛇足的に加えるが、“政治”的なものについてである。ここでいう政治的な関心を持つというのは、特定の政治家と親密になれとか、特定の政党と深くかわれということではない。むしろ、政治には一定の距離を保ち、冷めた目で直視し、政治を正す発言をしてもらいたい、ということである。

政治に関心を向けてほしいということを間違えて、政治家のパーティーにいそいそと通ったり、政治家に献金したりは、してほしくない。

出版業界の分割？

小稿執筆の現時点では、消費税実施の詳細は十分にみえていない。三カ月くらいの実施状況をみた上でなければ、展望も予測もつかない、というのが正直なところである。

ただ一つだけ断言できることがある。何度も繰り返すが、業界を挙げて、消費税廃止に向けて取り組むこと。これ以外にない。その他はすべて仮定としての上でしか考えられない、というところである。

さて、紙数の残りも少なくなったので、直接消費税と関係することではないが、提案をしたい。

思い切って出版社団体と出版流通システムを再編成したらどうだろうか。

売上げ数百億円、数千億円の出版社と数億円以下の出版社が同じルールで、同じ土俵で相撲をとろうとしているところに基本的な無理がある。

マス志向の出版社と小部数の専門書出版社はすべての点で異なる。それを同一流通ルールで処理しているところに矛盾がある。

現在の主要取次会社が発足した一九四九年から数年間

は大手出版社といっても、そう巨大ではなかった。

大手のマス志向の出版社、マス・マガジン発行の出版社は大手取次と取り組む。専門書出版社は、新たに専門取次を創設して新ルールで取引をする。

その方がコスト面でも節減できるのではないか。

大手取次の取引先書店は七、八千店か。専門書出版社はそのうち十分の一もあれば売上げの九割以上をカバーできるのでないか。

誤解のないようにしておくが、新ルールを決めて、ルール以外は一切を遮断したほうがいいなどとは思っていない。専門書出版社相手の専門取次が、大手取次会社の配送網を利用し、運送料金は大手に準ずることなどはむしろ歓迎すべきことである。

他の業界のことなどほとんど知らないが、大手と中小はすみ分けをしているようである。それによって格差が拡大するかも知れないが、それでもいいではないか。

量に熱中する出版社と質にこだわりつづける出版社の同衾はみえていて気持ちがいい。ぜひご一考をおねがいしたい。

流通と読者の顔

ここ数年の出版業界の動きをみていて、感じていることをあと二つほど加えておきたい。

一つは、書店のSA化のこと、日書連は早いうちにテストランをはじめたいとしている。SA化が現実化してきた。これに対して絶対反対の出版社もあるが、関心をもっている出版社もある。大手取次はすでにオンライン化を実施中。だが、出版社・取次会社・書店を情報処理センターを設けて結び、集中処理するには、乗り越えなければならぬハードルが高すぎる。

総論賛成、各論では反対、あるいは建前仲良し、本音はバラバラをつづけてきた業界には、大改革を実施する準備ができていない。この実現のためにも、業界そのものを再構築した方がいいと思う。

日書連構想のSA化で、書店と取次を統一しオンライン化するだけでも大変なのに、この端末を出版社にたぐにはどうしたらいいのか。書店と取次間では道半ば。勇気ある出版社はいつ名乗り出るのだろうか。

二つ目。昨年十二月初め、取協が新買切り制案を提案した。その後の消費税問題で討論が広範に広がっていく

中で、一部から買切り制は無定価方式であってもいいのではないかの話も出た。個人的な案であって、公開はされていないようだが、出てきても不思議でない案である。反発は予想されるが、いずれ出てくるものと思っていた。つまり、出版社は卸値だけを決めて取次に買いとらせる。取次は自らの判断で手数料分をとって書店に卸す。返品はなしである。

但し、この実施には蛮勇が必要。再販制を壊すのは必至だからである。消費税のため再販制がなくなってしまう壊されるようであれば、業界としても、これくらいの思いきった発想で討論するのも必要だという点についてのみ同意できる。

無定価制の論議は現実には危険を伴う。したがってその前に、流動正味制との考えもある。出版社側がまず、正味を統一しないで、販売政策によって商品別に正味を変える方法である。

出版業界内では、流通や再販制を空気に思っている人が少なくない。その人たちは出版社は本さえ作れば、あとは、取次と書店の責任と考える。

売ることに重きをおかないメーカーが存在しているのも、出版業界の特徴だといってしまえばそれまでの話だ
が。

出版社、書店、それぞれ、顧客の実態を把握している社、あるいは店がどれほどあるのだろうか。

出版社はスリップの分析はしていても、読者個人の顔はほとんどみえていない。いくらかでも、個人の顔がみえていたという自信をもっている出版社があるなら、間違いなくその出版社は安定しているといっている。

書店の場合でも、一個人の生涯読書計画、または一族の読書計画の相談にあずかっている店がどれほどあるだろうか。

見事なほどの品揃えをして、顧客との対話十分な店もあるが、その数はそう多いとは思えない。

消費税問題は、これまで出版業界の抱えてきた矛盾を次々と露出させるのではないかと感じている。それらを回避しないで正面から受け止めることが、いま、業界に要請されていると思う。

小林一博（こばやし・かずひろ）

一九三二年福岡県生まれ。日本読書新聞、日本エディタースクール、ほるぷ、新文化通信社などを経て文筆業。著書『本とは何か』（講談社）、『書店』（教育社）、『本づくり必携』（にっかん書房）、『日書連四十年史』（日書連）。

〔人文書講座Ⅷ〕

フランス革命二〇〇年

松浦義弘

1

フランス革命は、近・現代史上の大事件として、多くの人びとの情念をゆりうごかし、知性を刺激しつづけてきた。このため、この革命を論じた著作は、革命当時から二〇〇年後の今日にいたるまで、おびただしい数にのぼっている。だがこの二〇〇年間のあいだには、いくつか大きな断層があった。

たとえば、ソルボンヌにおける革命史講座の設置（一八八六）。このとき、フランス革命を論じる人びとと論

じ方が変わった。そのときまで、フランス革命史家は、大学教授やいわゆるその道の専門家であることがむしろまれだった。ルイ・ブランはジャーナリスト、ラマルティエは作家、ビュッシュは活動家、そしてトクヴィルは政治家であった。フランス革命は、同時代のフランスの秘密をそこに探ろうとする者すべてに大きくひらかれていた。ときの政治に情熱をもやしなうが、自由な発想をもつて思い思いに革命が論じられた。しかしソルボンヌに革命史講座が設置されて以後、革命研究はもっぱら大学人のものとなる。方法的な史料批判によって獲得される

「事実」にもとづく過去の「科学的」再構成、この実証主義史学の条件が、フランス革命研究にもとめられるようになる。

またたとえば、世紀転換期におけるマルクス主義のフランス革命史学への浸透。なによりもジャン・ジョレスが、フランス革命の政治的側面に、経済的・社会的現象の重要性にかんするマルクスのテーゼを付加して、革命研究の重心を社会的なもの、経済的なものに移動させた。彼は、その著『フランス革命の社会主義的歴史』において、フランス革命は長期にわたる社会的・経済的進化の到達点であり、ブルジョワジーを政治権力と経済制度の主人の座につけたのだ、と論じた。マティエからルフェーヴル、そしてソブールへとつづくフランス革命研究の巨匠たちは、このジョレスの観点を継承して「ブルジョワ革命論」を展開し、今日までつづく革命研究の主流派をかたちづかった。

だがこれらの断層にもまして大きな断層は、近年、「ブルジョワ革命論」をめぐる活発に展開されているフランス革命の再解釈の動きであろう。一般に「修正主義」と総称されるこの動きは、従来の定説である「ブル

ジョワ革命論」にたいする実証的・理論的な批判となっており、フランス革命論に重大な転換をもたらしつつあるようにみえる。いったいこの動きは、どのような内容と意味をもっているのだろうか。「ブルジョワ革命論」との対比をとおして、そのことを考えてみたい。

2

まず、修正派が批判する「ブルジョワ革命論」とはいったいどういうものなのか。

「ブルジョワ革命論」とは、フランス革命という政治現象を、封建制から資本主義への生産様式の移行という経済的観点から理解しようとするものであった。すなわち、やや図式的にいえば、封建社会内における資本主義的生産様式の発展にともなって、それをなう新しい階級としてのブルジョワジーの経済的・社会的な力が増大し、既存の支配階級である封建貴族との階級対立が激化する。こうして革命がひきおこされブルジョワジーの政治的勝利が確保された結果、彼らは自己の利害を貫徹して封建的生産様式を廃棄し、資本主義の順調な発展をもたらしたので、と。

もちろんこれは、極度に単純化した図式である。ひとくちに「ブルジョワ革命論」といっても、歴史家によってかなりニュアンスの相違があり、ことに、ジョルジュ・ルフェーヴルの以前と以後では、観点や実証レベルの相違のため、かなり異なっている。

ルフェーヴル以前の歴史家においては、フランス革命は議会やクラブあるいは革命指導者の観点をとおしてみられてきた。このため、都市や農村の民衆の革命行動は、本質的に、封建制や貴族にたいしてむけられたブルジョワジーの運動の反映と考えられ、革命における第三身分の均質的側面が強調されてきた。第三身分の諸階級の継起的分化が革命の諸段階——①貴族の反乱、②八九年の立憲的革命、③九二年八月十日の共和主義の革命、④九三年六月二日の社会民主主義の革命、⑤九六年のパブリの共産主義の革命——を構成すると考え、ジロンド派と山岳派の対立の背後に所有権をめぐる階級対立をみとめたアルベール・マティエも、議会内の党派のプログラムなどからその階級の基礎を推定しようとするにとどまっていたため、山岳派（ブルジョワジー）の政策と民衆の利害を同一視する見解におちいった。

これにたいしてルフェーヴルは、パリや議会から目を転じて、それまで革命史研究の対象から脱落していた地方の農民層にかんする研究に没頭した。彼の学位論文『フランス革命期のノール県の農民』は、末端の史料の膨大かつ厳密な収集とその統計的处理をつうじて、ノール県の農村の多様な社会経済構造を明らかにするとともに、起源（農村経済の危機、領主の搾取）、進行過程（バステイーユ牢獄の襲撃に先だって農民の運動は存在し、さらに、以後に展開する「大恐怖」や農民騷擾も革命の政治的プロセスとはかならずしも一致しない）、傾向（反封建的かつ反資本主義的）、結果（封建制の全面的廃棄）において「ブルジョワの革命」とは異なる自律的な「農民の革命」を革命史のなかにうかがわがせたと。さらにルフェーヴルはこの成果を革命全体に敷衍し、『一七八九年』にみられるように、フランス革命を、「貴族の革命」「ブルジョワの革命」「都市民衆の革命」「農民の革命」という、それぞれ自律的な四つの革命の複合的産物とする革命像を提示するにいたったのである。第二次世界大戦後、A・ソブール、G・リュージェ、K・テネソンらは、ルフェーヴルが『フランス革命期のノール

『農の農民』や『一七八九年』でしめした分析手続きや複合革命論を研究の枠組みとしてうけいれながら、彼のやりのこした都市民衆、とくにバリのサン・キュロット大衆に光をあてた。彼らはいずれも、入手しうる史料を数量的に処理してバリ民衆の社会的構成を明らかにするとともに、その行動形態や意識にまで分析の手をひろげ、『ブルジョワの革命』とは異なる自律的な「都市民衆の革命」の存在を明らかにして、革命の社会経済史研究に重要な寄与をなした。

だがこのように、フランス革命が複数の革命からなり、しかも、都市や農村の民衆の革命が自律的で反資本主義的な性格をもっているとなると、フランス革命を「ブルジョワ革命」とすることはたして可能なのであろうか。ルフェーヴルやソブールは、それにたいして、つぎのように答える。

十八世紀後半における「貴族の反動」に直面したブルジョワジーは、貴族の特権に基礎をおく「封建制」に抗してたちあがるが、ブルジョワ革命の勝利は、都市や農村の民衆層との「同盟」なくしてはありえなかった。こうしてブルジョワジーは、民衆層とのあいだに「同盟」

を形成して内外の危機をのりきり「封建制」を一掃するが、彼らの革命の勝利が濃厚になると、反資本主義的性格をももち本来異質な存在である民衆層の運動を弾圧し、資本主義的生産様式に適合的な法的枠組みとブルジョワジーの勝利を確保するのだ、と。

以上のように、「ブルジョワ革命論」は、それじたい、実証的・理論的な深まりをしめしながらも、基本的に、①フランス革命の原因は封建制をになう貴族と資本主義をになうブルジョワジーの階級闘争であり、その結果はブルジョワジーと資本主義の勝利であること、②したがって革命は、封建制から資本主義への移行における決定的な断絶を画すものであること、③したがってまた、この断絶をもたらした歴史的主体はブルジョワジーであること（ただし実証分析は欠如）、以上の三点を共通の論点としている。

一九五〇年代なかばから展開する「ブルジョワ革命論」の見直しの動きは、これら三点をめぐる理論的・実証的批判というかたちをとることになる。

「ブルジョワ革命論」にたいしては、アンシャン・レジームの社会史研究が進展するにつれて、その主要な論点にかんして厳しい批判があげられた。これは、もっぱら「ブルジョワ革命論」の論点の①、つまり革命の原因と結果を実証的に批判することによって、そのほかの論点をも同時に批判するという論法をとった。

まず、①のフランス革命の原因をめぐることは、貴族身分とブルジョワジーの両者のエリートのあいだでは生活様式や価値観が均質化しつつあり、その財産もともに、利潤を最大にする資本主義的投資よりも「所有」への非資本主義的投資（土地、官職）にもとづいていたこと、むしろ貴族の経済・文化面での活動のほうが資本主義的・市民社会的な側面をもっていたこと、などが実証され、革命前におけるブルジョワジーと貴族とのあいだの階級闘争に革命の原因をみる議論が否定された。また、フランス革命の結果にかんしても、革命はブルジョワジーの支配を確立したのではなく、基本的に土地所有に基礎をおく名士エリートを創設したのであり、資本主義の確立

に寄与したというよりもむしろ資本主義の発展を遅らせたのだ、とされた。したがって、「封建制」を廃棄したフランス革命を封建制から資本主義への移行における決定的な断絶とする②の見方にたいしても、革命に先行して「封建制」のブルジョワ化が進行していたことや、革命の前後のエリート支配の一貫性をあげて、連続性が対置された。また当然③の革命になったブルジョワジーにかんしては、その存在そのものが否定された。

しかし、貴族とブルジョワジーの階級闘争にかえて革命の原因をどこにもとめるかという点については、修正派のあいだにはほとんど一致がなかった。下級国王役人の欲求不満（アルフレッド・コバン）とか、王政による地主階級の疎外（ドウニ・リシェ）とか、富裕な貴族と貧困な貴族の反目（ジャン・メイエ、ギ・シヨシナンノガレ）とか、上級の司法官と下級の法律家とのあいだの反目（レオナード・R・バーランステイン）とか、既成の知識人と野心をもっているがいまだ成功しない作家やジャーナリストのあいだの反目（ロバート・ダーントン）とか、まことに多様である。最近の研究では、エリート内部における社会的流動性の危機のためにさまざまな社

会的「緊張地帯」が形成され、これが、一七八八年秋のバリ高等法院の決定（新たに招集される全国三部会の採決は身分別でおこなう）をきっかけに、エリートの貴族部分と平民部分の分裂をもたらしたことに、革命の原因がまとめられている。

以上のように、修正派は、詳細な実証研究にもとづいて、貴族とブルジョワジーの階級対立という「ブルジョワ革命」原因論を否定し、革命は断絶ではなくて連続であること、主流派のいう革命的ブルジョワジーは存在しないこと、をしめした。しかし彼らによってその代わり提示された革命集団はじつに多様であり、革命集団とはなんであったのか、ということにかんしては、かならずしも意見の一致がみられない。それ以上に問題なのは、修正派の批判が主流派の「ブルジョワ革命論」の枠組みを前提にした議論であったことである。

つまり、こういうことである、一方の「ブルジョワ革命論」は、革命の原因をブルジョワジーと貴族の階級闘争、革命の結果をブルジョワジーの経済的・社会的ヘゲモニーの確立とし、そのあいだに介在する革命は、ブルジョワジーのヘゲモニーの確立に奉仕するブルジョワ革

命だ、とした。九二年から九四年にかけての革命の激化も、革命を防衛するために民衆層との同盟を必要としたブルジョワジーが彼らの要求に譲歩した結果であり、最終的には、みずからの利害を貫徹するのだ、と。これにたいして修正派も、主流派による革命の原因・結果論に批判を集中し、革命の原因は貴族とブルジョワからなる「エリート」の自由主義的改革の要求、革命の結果はより一体化した「エリート」の創設であるとした。そして九二年から九四年にかけての革命の激化は、過去に執着する民衆層の革命への介入によって生じた「横すべり」であり、十九世紀の自由主義的エリート支配へいたる潮流からの一時的な逸脱であった、とした。つまり、主流派と修正派はその主張は正反対ながら、どちらも、フランス革命の社会的な原因と結果をまず問題とし、そのあいだに介在する革命の意味は、あらかじめ確定されたその原因・結果の図式に見合うかたちで解釈したのである。こうして両者いずれにおいても、革命経験それじたいの性格や革命家の意図は正面きって問われないということになった。

このような事態が変化して革命経験それじたいが問わ

れるようになるためには、主流派と修正派が共通して前提としていた議論の枠組みそのもの、原因―結果の図式そのものが問い直されることが必要であった。それは、一九七〇年代末に修正派の一人、フランソワ・フュレによってなされることになる。

4

一九七八年に刊行されたフュレの著作『フランス革命を考える』は、それまでの革命研究の議論の枠組みを問い、新しい研究の方向性をうちだそうとしたものであった。すでにフュレは、この著作から七年前に『アナール』に掲載した論文「革命的教理問答」において、主流派による「横すべり」批判にたいする反批判を展開するなかで、かつての自己の立場からの微妙な転換をしめしている。すなわち、「横すべり」という概念に固執するのは、フランス革命のプロセスがその社会的性質と矛盾するものをふくみ、たえまなく横すべりするという点で、「ブルジョワ革命」という概念に還元されないからである、とのべ、それは、革命のプロセスが自律的な政治的・イデオロギー的力学によって構成されていたからだ、と主

張した。そして、フランス革命という現象の特異な論理を理解するためには、政治的次元において革命運動を構成するものの内的分析が不可欠である、としていたのである。

かつての著作『フランス革命』（ドゥニ・リシェとの共著、一九六四―六五年）では、フュレは、革命のプロセスをその起源と結果から解釈した。そして九二年から九四年にかけての革命の激化は、民衆の介入による革命の「横すべり」と規定し、自由主義的革命であるべきフランス革命の逸脱現象とした。「横すべり」とは、いわば、自由主義的な革命と恐怖政治的な革命との分割を時間軸のなかに位置づけるための手段だった。だが「革命的教理問答」では、革命のプロセスにはそれ特有の力学が存在したことが主張され、革命現象そのものの内在的分析の必要性が説かれている。「横すべり」は革命初期からたえまなく生じているのであって、九二年から九四年に局限される事故でも逸脱現象でもない。かつてと同様に「横すべり」という概念が使用されているが、それが使われるコンテキストはあきらかに異なっているのである。これはフュレの歴史認識の微妙な変化をしめすも

のだった。そしてそれが明確なかたちをとったのが、『フランス革命を考える』なのである。

この著作は、それまで主流派や修正派によって指摘されてきたフランス革命の原因に、まだ気づかれていない原因を代えようとするものではなく、両派とともに縛ってきた原因論ないしは原因―結果の図式からの脱却をめざすものであった。フュレは、従来の革命史学を批判しつつのようという。

革命史学は、従来、持続性によって特徴づけられる、原因と結果の総体としての革命と、急激な変化によって特徴づけられる、集団行動の独特の動態としての革命という、分析のふたつの対象を混同してきた。しかしこのふたつの対象を重ねることはできない。時期も相違する。このような混同が生じるのは、革命の展開はその原因のなかに記載されている、なぜなら革命家はアンシャン・レジームを破壊してそれに新しい秩序を代えるという以外の選択をもたなかったから、という暗黙の前提が存在するからである。しかし、自分達の行動の原因を回顧的に組織するのは革命家の意識である。とすれば、断絶の言説は変化の幻想の所産だったのではなからうか。

こうしてフュレは、トクヴィルとともに、革命の原因の分析と革命の展開の連結を拒否する。そして、過去からの根本的断絶を表明する革命家の表象体系―行動体系の記号論的分析をおして革命現象そのものの理論を作成する。フュレは、つぎのようという。

フランス革命の政治行動の中心には、人びとの行動の選択を決定する表象のシステムがみいだされる。このシステムにおいては、民衆という経験的現実に対応する概念であると同時にあらゆる革命的諸価値を統合するシンボルである「人民」が中心的な表象をなしている。そしてこの「人民」は、権力の正当性の根拠であり、「人民」の名において語りその意志をのべる権利を独占した者の手に権力をゆだねる。権力闘争を一時的に決定するのはこの象徴である。だがこの表象のシステムにおいては、「人民」の対極に、たえず「陰謀」をたくらむ、さまざま顔をもった「敵」にでくわす。行動が考えられ組織されるのは、この象徴との関係においてである。フランス革命は現実の敵に事欠かないが、その重要性はその象徴的役割に由来する。しだいに脅威を増し、攻撃的となる「敵」の表象は、革命史をつらぬく恐怖と希望の高揚

をささえ増幅する。こうして、革命の進展は新たな急進化とテルミール（恐怖政治）をもたらす。三部会の招集からテルミールにいたるまで革命政治をたえず支配するのは、「人民」とその「敵」を中心概念とする同じ表象のシステムであり、同じイデオロギーであった。それは、権力闘争の場であり、政治集団の差異化の道具であり、大衆の新しい国家への統合の手段であり、そしてまた、最初の民主的文化をうみだしたのである。

以上のように、フュレは、みずからもかつて囚われていた原因―結果の図式から脱却し、革命政治そのものを正面からとりあげた。その結果、革命期の人びとの言説Ⅱ表象システム（政治の幻想）に由来する革命政治に固有の論理をつかみだし、革命政治はその原因と結果の論理的連鎖に従属しないし、先行する社会構造から機械的に演繹することもできないことをしめした。そして、客観的持続性という考えと急激な変化という考えを調停した。同時に、フランス革命が根本的に新しい民主的文化を創造したこと、つまり政治的レベルでの断絶を画したことをしめした。だが他方で、革命政治は特定集団の利害とは分断され、従来の研究が集中的に問題としてきた、

革命をになった階級ないしは集団の問題は、まったく問われることがなかった。

フュレの議論はきわめて抽象的で極端であった。しかし、従来の議論の前提を根底的に問いなおしたことや、革命期の人びとになわれた象徴システムやことばを政治Ⅱ権力の問題として考察したこともあって、新しい革命研究を刺激した。なかでも興味ぶかいのが、リン・ハントの研究である。

5

ハントの著作『フランス革命の政治文化』は、革命政治にかんする独自のプロセス理論を構築したという点で、最近の研究のなかでもっとも注目されるものである。彼女の研究は、政治の本質はその社会的基盤によって説明されうるといふ、従来の研究が前提とする考え方から生まれたものではなかった。この考え方にたてば、革命の結果と異なる革命家の意図や目的、つまり革命期の政治は軽視されてしまうことになるからである。ハントはそのような前提に疑問を呈し、革命期の政治をそれじたいとして検討する。その結果、フランス革命の固有の成果

は、社会的・経済的なものではなく政治的なものであり、レトリックやシンボルや儀式の実践によって構成される新しい「政治文化」の創造であったことを明らかにする。この政治文化が革命期の政治行動の論理を提供し、革命期の経験に統一をあたえていたというのである。

ではいったい、新しい政治文化はどのようにして生じ、どのような内容をもっていたのだろうか、ハントはつぎのようにいう。

どのような政体も、統治の正統性をつたえ再確認する儀式や象徴なしではありえない。ところで、ブルボン絶対王政は、なかば神的な国王を聖なる中心とし、権力を君主制のシンボル装置や王の身体との距離によって定義していた。だから、君主制が崩壊し、アンシャン・レジームとその政治的権威にたいして挑戦がなされたとき、君主制をささえてきた儀式や象徴も挑戦をうけることになる。君主制や国王の身体とのあらゆる象徴的連関物が除去され、それに代わって、新たな権力秩序の理念や諸原則を正確に表現するような言語やシンボルや儀式、つまり「新しい政治文化」が形成されることになる。

従来、革命期の言語はイデオロギー的立場の反映とさ

れ、言語の外や下に「本当の」意味がもためられてきた。だが、革命期の言語はイデオロギー的立場のたんなる反映ではなくて、それじたい、イデオロギーを生みだし、政治的・社会的世界を再構成する手段であった。そこで革命期の言語は、その内部的パターンという観点からテクストとして考察されねばならない。そのとき、革命期の政治的レトリックにおいては、不平等と相違の社会である過去のフランスの拒否とこれを前提とする国民共同体の創造が強調されており、それゆえ、国民共同体内部に不平等や相違をもちこむ政治家や政党は原理的にみとめられず、組織にもとづく政治は陰謀のくわだてと同一視されたことが明らかにされる。こうして、自由主義的な政党政治の可能性がとざされるとともに、恐怖政治もたらされることになった。と同時に、革命期のレトリックにおいてこのような組織にもとづく政治が拒否された結果、政治闘争が狭義の政治領域の外部に拡張し、シンボルや儀式の領域、つまり日常生活の領域で展開されることになったのである。衣服、印章のデザイン、貨幣、カレンダー、そして祭典、いずれもが、政治闘争の場をなした。

ところで、新しい政治文化はどのような集団ないしは

階級によってになわれたのだろうか。ハントはみずからの実証研究にもとづいて、その点にかんして興味ぶかい論点を提示する。すなわち、新しい政治文化になった階級は、アンシャン・レジームの政治指導者にたいして新しいだけでなく、その顔ぶれが革命の十年間にほとんどたえまなく変化した。さらに、革命初期にはアンシャン・レジームとの妥協が可能であると考えられたため、政治指導者のなかには多くの貴族、国王役人、かなりの数の旧世代の人びとがふくまれていたが、革命の進行とともに政治文化が急進化し、現存のあらゆる慣習や伝統との決裂がよりつよく主張されるようになるにつれて、アンシャン・レジームの権力の中核に近い者からよりマージナルな者へと政治指導者の性格も変化したという。つまり、新しい政治文化になった階級は、新しい政治文化との持続的な相互作用によってかたちをあたえられたのであり、政治文化の急進化と相関してその性格と顔ぶれをたえず変えた、というのである。したがって、そもそも革命になった階級は、主流派や修正派が想定したような、安定したひとつの社会的カテゴリーではなかつ

たのだ。

以上のように、ハントは、原因—結果の図式にかんするフュレの問題提起を継承し、革命政治を復権させている。しかも革命政治は、「社会的なもの」の上にあるのでもなく、「社会的なもの」に関連づけて理解されるのでもない。こうして、革命政治をつくりあげていた言語だけでなく、シンボルや儀式をも構造的に分析して、このような「政治文化」の劇的変容こそが、フランス革命の所産であることを明らかにした。断絶は社会的・経済的なレベルにもとめられることなく、政治的なレベルにもとめられた。だがハントは、社会的なものもわすれない。「政治文化」をになう「新しい政治階級」に目をむけて、この階級が「政治文化」の変容と相関していたことを実証する。修正派の主流派批判らしい、階級の問題は、ながらく混沌たる状況にあった。革命的ブルジョワジーの存在は実証的に否定されたが、それに代わって提示された多様なエリートは統一的な像を結ばなかった。だがいま、ハントによって、この多様なエリートが「新しい政治階級」として、文化との相関関係のもとに統一的に把握されたといえよう。

フランス革命から二百年、革命の論じ方はいま大きく変わろうとしている。かつてのように、封建制から資本主義への移行の画期としてフランス革命を論じることからも、あるいはそれを否定してフランス革命の経済的・社会的レベルでの連続性を主張することからも、研究者の関心は大きくへだたりつつある。それにかわって研究の焦点となりつつあるのは、政治である。とはいっても、かつてのように、議会やクラブ、政治指導者に関心がむけられているわけではない。レトリックやシンボルや儀式、それらに表現された政治の活力や権力性が問題とされている。歴史学は現実の社会の動きや人びとの感覚と無縁ではない。フランス革命史学にいま大きな地殻変動がおこっているとすれば、それは、現実の社会や人びとの感覚が大きく変容しつつあるからだ。フランス革命史家は、議会や政治指導者に限定されない、広義の政治Ⅱ権力の問題にむきあっているのである。

文 献

- 柴田三千雄『パリのフランス革命』（東京大学出版会）
 柴田三千雄『フランス革命』（岩波書店）
 モナ・オズーフ『革命祭典』（岩波書店）
 Y・M・ベルセ『祭りと叛乱』（新評論）
 立川孝一『フランス革命と祭り』（筑摩書房）
 フランソワ・フュレ『フランス革命を考える』（岩波書店）
 多木浩二『絵で見るフランス革命——イメージの政治学——』（岩波新書）
 リン・ハント『フランス革命の政治文化』（平凡社）
 高橋幸八郎『近代社会成立史論』（日本評論社）
 高橋幸八郎『市民革命の構造 増補版』（御茶の水書房）
 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』（岩波書店）
 遅塚忠躬『ロベスピエールとドリヴィエ』（東京大学出版会）
 バリントン・ムーア『独裁と民主政治の社会的起源』（岩波書店）
 E・J・ホブズボーム『市民革命と産業革命』（岩波書店）
 I・ウォーラーステイン『資本主義世界経済』（名古屋大学出版会）
 B・グレートウイゼン『フランス革命の哲学』（法政大学出版局）
 D・モルネ『フランス革命の知的起源』（勁草書房）

ロバート・ダーントン『パリのメスマー』（平凡社）
 河野健二『フランス革命とその思想』（岩波書店）
 中木康夫『フランス絶対王制の構造』（未来社）
 柴田三千雄『フランス絶対王政論』（御茶の水書房）
 赤羽裕『アンシャン・レジーム論序説』（みすず書房）
 マルク・ブロック『フランス農村史の基本性格』（創文社）
 ルッチスキ『革命前後のフランス農民』（未来社）
 アルベール・ソブール『大革命前後のフランス』（法政大学出版局）
 吉田静一『近代フランスの社会と経済』（未来社）
 湯浅赴男『フランス土地近代化史論』（木鐸社）
 ルフェーヴル『一七八九年——フランス革命序論——』（岩波書店）
 ルフェーヴル『革命的群衆』（創文社）
 ルフェーヴル『フランス革命と農民』（未来社）
 ジョージ・リユーデ『フランス革命と群衆』（ミネルヴァ書房）
 ジョージ・リユーデ『イデオロギーと民衆抗議』（法律文化社）
 ジョージ・リユーデ『歴史における群衆』（法律文化社）
 アルベール・ソブール『フランス革命と民衆』（新評論）
 柴田三千雄『パブーフの陰謀』（岩波書店）
 平岡昇『平等に憑かれた人々』（岩波新書）
 杉原泰雄『国民主権の研究』（岩波書店）
 井上すず『ジャコバン独裁の政治構造』（御茶の水書房）

箕作元八『フランス大革命史』（講談社学術文庫）
 ミシュレ『フランス革命史』（中央公論社）
 ミシェル・フーコー『監獄の誕生』（新潮社）
 ハンナ・アレント『革命について』（中央公論社）
 アルベール・ソブール『フランス革命』（岩波新書）
 マチエ『フランス大革命』（岩波文庫）
 桑原武夫編『フランス革命の研究』（岩波書店）
 河野健二『フランス革命二〇〇年』（朝日新聞社）
 ボール・ニコル『フランス革命』（クセジュ文庫）
 前川貞次郎『フランス革命史研究』（創文社）
 ジャック・ゴデシヨ『反革命』（みすず書房）
 木崎喜代治『マルゼルブ』（岩波書店）
 井上幸治『ロベスピエールとフランス革命』（誠文堂新光社）
 M・プロワゾ『ロベスピエール』（クセジュ文庫）
 J・M・トムソン『ロベスピエールとフランス革命』（岩波新書）
 井上幸治『ナポレオン』（岩波新書）
 アンリ・カルヴェ『ナポレオン』（クセジュ文庫）
 ヨーハン・ゴットフリープ・フィヒテ『フランス革命論』（法政大学出版局）
 セレスタン・ギタール『フランス革命下の一市民の日記』（中公文庫）
 ビエール・ガスカール『ロベスピエールの影』（法政大学出版

局)

エドモンド・バーク『フランス革命の省察』(みすず書房)

オクターヴ・オブリ編『ナポレオン言行録』(岩波文庫)

アーサー・ヤング『フランス紀行 1787, 1788 & 1789』(法政大学出版局)

コンドルセ『公教育の原理』(明治図書)

タレイラン他『フランス革命期の教育改革構想』(明治図書)

ランゲ『バステュー回想』(現代思潮社)

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『パリの夜』(現代思潮社)

シエイエス『第三階級とは何か』(岩波文庫)

クラウゼヴィッツ『戦争論』(岩波文庫)

河野健二編『史料 フランス革命』(岩波書店)

メルシエ『十八世紀パリ生活誌——タブロー・ド・パリ——』

(岩波文庫)

松浦義弘(まつうら・よしひろ)

一九五二年福島県生まれ。東京大学大学院博士課程満期退学。フランス近代史専攻。訳書に、リン・ハント『フランス革命の政治文化』(平凡社)、主要論文に「フランス革命史の変遷にむけて——「アナール派」をめぐる新しい政治史」(『思想』第七六九号) などがある。

弘報委員会より

○人文会の活動年度は、五月より翌年四月までとなっております。さる五月に総会を開催し新年度の体制を決定いたしました。

○最初にご報告申し上げますことは、中平千三郎氏(東京大学出版会)が、会長を退任されたことです。

皆様方ご承知のように、中平氏は小会の創立時(一九六八年十二月)より代表幹事として活躍され、会の発展に尽力されました。

当委員会よりお願いして、ご多忙のところ「退任のご挨拶」をお書きいただきました。御礼申し上げます。

○さまざまな二十周年記念事業が無事終了し、ホッとしております。

各委員会は、新年度の活動目標を立て、努力してまいりますので、宜しくお願い申し上げます(委員会の構成については、巻末の名簿をご覧ください)。

他業界の教育を受けて

旭屋書店営業部本店 隅山泰助

消費税導入、買切り制の問題、読者が望む本が早く手に入らないなどの流通問題、そしてお客様の読書傾向の多様化及び本に対する価値観の変化等々。今、出版界はいろいろな問題に直面しています。

私も、出版界と読者との接点に位置する書店に入って、早二十年の歳月が過ぎようとしています。その間にはいろいろな事がありました。七十年代の書籍の隆盛期、八十年代の雑高書低の時代から雑低書低の時代、そして昨今は書籍の売行きが回復してきていると言われています。

このような状況の中で、昨年の八月二十九日から十月三日にかけての通算一カ月に渡り、他の業界の研修（日本商工会議所の主催、ジャスコ株式会社後援の実地体験研修）に参加することができ、二十年間の私自身の仕事を振り返り、原点に戻ってもう一度仕事のやり方を見直すチャンスに恵まれました。

研修の日程は、千葉県幕張での六日間の集合研修及び大阪に戻っての三週間の店舗実習で、研修内容は次のようなものでした。

(1) 集合研修

- ・商店の計数管理・店舗クリニック
 - ・共同開発店舗と地域開発
 - ・基本的販売管理手法のマスター
 - ・「サービス」を学ぶ(東京デイズニールランド見学)
 - ・小規模店舗の活性化
 - ・家業から企業への脱皮等々
- ## (2) 店舗実習

- ・ジャスコの組織と統一用語
- ・ジャスコの勤務ルールと心構え
- ・ジャスコの販売基礎訓練
- ・すばらしき販売員として
- ・レジ業務(実地訓練・ロールプレイング)
- ・商品・伝票の流れ及び管理実習
- ・棚卸の手法とロス管理
- ・商圈概要と店舗特性
- ・POP技法について
- ・競争店調査の手法及び実習
- ・動線調査の手法
- ・ジャスコの数字管理実習

・Q・C活動と技法及び発表大会

・売場実習

以上のようなプログラムによって、長くてまた短かった体験研修を無事終了することができました。このような多岐に渡りそして系統だった長期間の研修は初めての体験で、その中から様々のことを学ぶことができました。

その第一は、「商業」とは「小売業」とは何を指し、そしてお客様に対してどのように対応すべきかということとであります。私もこの「書店業」という小売業の世界に入り、早二十年になりますが、その二十年の間「小売業とは？」などという問題に対して、あまり深く考えることなく過ごしてきました。「商人」とは、お客様の半歩先を進む道案内人である。そして商業を通じて地域社会に奉仕し、今、お客様が何を望み、そして私達に對し何を求めているのかを良く認識し、適品・適時・適量の原則に立って販売を行わなければならない。」という言葉に接したとき、それを日常の仕事の中で実践することの難しさ、今までの二十年間そのことについて深くも考えなかったことに対し、恥ずかしさを感じました。

非常に当たり前のことではありますが、「商売」とい

うものを考えるとき、常にその前提になるものは何かと言いますと、それは「お客様」ということではないかと思ひます。「お客様＝読者」という概念をいつも頭の中に置いて考え行動することが、「商売の原点」だと思ひます。もちろん、ここで言う「読者」とは、最大公約数と最小公倍数のお客様のことで、その両方の読者を大切にすることが必要だと思ひます。また、読者のニーズの多様化と変化の速さがどんどん進んでいる状況の中では、物事に対しては長期的に・根源的・多面的に見た考え方を持たなければならぬということをも、痛切に感じました。日常において仕事をしている時は、ついつい目先のことだけを考え表面的なことしか見ないで物事の本質を見失ひ、また、一つの側面しか見ないで物事を判断しがちです。

出版界の中でも、軽薄短小の時代が来たとか、コミック＆マガジンハウスが良いとか、郊外店の全盛時代とか、カセット文庫や廉価版のビデオの時代だとかいふ評論を良く聞きます。しかし、その様な一時的な流れに惑わされて、失敗する事態がよく見掛けられます。やはりこのような論評に流されず、そして変な思ひ込みと偏見

を廃し、柔軟性を持って商売をやらなければならないのではないかと思ひます。いつも原点に立って、一時的な流行に流されず、しっかりと着実に進んで行かなければならないと考えました。

また「すばらしい販売員／＼てんびんの詩」のVTRで接客の原点を学びましたが、常に素直さを持ち努力を忘れずお客様の信頼に応え、お客様の立場に立って物事を考え、結果だけを求めずその行動の過程を大切に、商品に心を通わせ、売る側と買う側の気持が一緒になるという「てんびん棒のバランス感覚」を糧として、今後自分も含めて全員がお客様との接客に当たらねばならないと思ひました。

多数ある店の中から（特に書店という価格やその他のサービスの部分で特別に差を付けられない商売において）自分の店を選んでいただき商品を買って預ける、ということへの感謝の気持を大切にすることが必要だと痛感しました。（私も含め出版界は全体的に感謝の気持ち希薄なような気がします。）

いつも「誠意」と「熱意」と「創意」の三意を動かし、仕事をしなければならぬと思ひます。

第二に、以上のような考え方を持って商売を進めていく際に、その基本になるのは何かということを学びました。

それは事実をデーターとして捕らえ、科学的な分析により状況を把握するという技術的手法（動線調査や競争店調査など）と、数字で物事を捕らえるということなどの客観的に物事についての判断を下すための手法でした。例えば競争店調査とは、競争店の良さを調べ、競争店と比較した自店の問題点を明確にし、自店の弱点を改善して、お客様の満足を達成することを目的とした手法です。重要なことは競争店調査をすることが目的ではなく、あくまで競争店を鏡にして自店を見直し改善することにより、お客様の要望に応えることがポイントです。

今まで私達も他のお店の動向調査や見学を行ってきましたが、ともすれば表面的なもの、ムード的なことに目が行き、客観的にまた具体的に的を絞って見ることで出来なかったのが現状です。ただ単に店を見て判断を下すのではなく、常に問題意識を持ち、調査の目的を明確にして、Plan・Do・Seeのステップを確実に踏んで、その競争店の良いところを正確に把握する必要があるとい

うことでした。

また数字の管理の問題ですが、そのことに關しては二つの前提条件があるということでした。それは数字で物ごとを捕らえることと、さらに商品そのものに触れることⅡ現場に立つことが絶対に必要だということです。抽象的な表現でなく、具体的な数字によって物ごとを捕らえ、正しい情報を伝え、状況を客観的に把握して、計数的な処理を行い、具体的な計画や対策を立てることが必要であり、さらにその上で商品に触れて実感として理解し、把握することⅡ現場に立つて流れを肌で感じることに、により、机上論Ⅱ数字の遊びにならないようにすることが大切だということでした。数字による客観的な見方と、現実の流れとを、上手にバランスを取って判断する必要があります。この前提条件をよく認識した上で、商品の計数管理・商品の金額管理・利益管理・効率指標などを学びました。その中でもバレード分析やABC分析そしてフェイシング数の相関分析などの科学的手法、さらにもっと具体的に売価と原価の関係および仕入れと売上と在庫の關係についての講義が本當に参考になりました。

振り返って私達の出版業界を見ると、「本」Ⅱ「文化的なもの」、文化的産業の一端を担っているという自負が先行し過ぎて、「数字」という問題を前面に出すと異端視される傾向があるようです。もちろん「本」という精神的な表現媒体、非常に曖昧模糊とした抽象的なものを、数字だけで判断することは、非常に難しくまたある一面では無意味なことではありますが、しかし、やはり日常の数字というものを確実に把握して、その上でいろいろな要素を盛り込んで売場構成を考え、またその他のいろいろな対策を立てることが必要だと思います。

少数は小部数なりの、大量販売の商品はそれなりの、自転車と自動車と同じ道の上で走らすのではなく、その本その本に合った対処の仕方では数字を生かして考える必要があると思います。「数字」というと無味乾燥な感じを受けますが、現実の流れをよく理解した上で数字を見ると、いろいろなことを物語ってくれるようです。もっとも数字を大切にしてお客様Ⅱ読者に支持される売場を考えていきたいと思っています。

第三として以上のような概論的なことや具体的な手法の次に学んだことは、「人」その教育の問題でした。

第一と第二に学んだことを現実の仕事の中で生かしていくのが「人」ですが、「人」がそれを実践し、現実にかかしていくのが一番難しいことだと思います。教育システムを確立し、マニュアルづくりを行い、そして一つ一つロールプレイングを交えて実地訓練を進めて、人を育てていくことの必要性を今回の研修で充分学びました。その中で特に感じたことは、確かにマニュアルを作り、スタッフを投入して教育を行っても、すぐにその店の実態が良くなるわけではなく、繰り返し繰り返し永遠に教育を行わなければならないということです。人が育たないとただ嘆くだけでなく、できることから一歩一歩前進しなければならないと思いました。

昨今、書店の従業員の知識がなくなってきたとか、何を聞いてもまともに答えられないというお客様からご指摘があります。確かに年間三万七〇〇〇点の新刊書籍の洪水の中では致し方ない部分もありますが、一番大切なことは、非常に基本的なことですが、お客様からの質問を確実に聞いて、自分自身で分からなくても、お客様と一緒に調べて調べそして探すという姿勢、読者が本を探す際の手助けをするという気持ちだと思います。いくら

素晴らしい理念と、高度な化学的手法や技術があっても、それを遂行し動かしていく人間の質が悪ければ、砂上の楼閣になってしまいます。やはり今回の研修でも、人材の育成が今後の企業の未来を決定するものと確信いたしました。

以上のように三つの大きな柱となる成果を今回の研修で学んできましたが、この通算一か月の研修で、ジャスコさんの社員の方々の仕事ぶりを目の当たりにみて、自分自身の今までの仕事に対する姿勢を、大いに反省いたしました。

その一つは、何事に対しても積極的に、また羞恥心を捨てて、真剣に素直にぶつかっていくという姿勢が、私には欠けていたということです。この出版業界においても、現実にはいろいろな問題が起こり、また今後においても業態が大きく変化してくるものと思います。その様な状況の中で、自分はやらなくても誰かがやってくれるだろうという消極的な姿勢では問題の解決は当然できません。また、偏った考え方、はずに構えた態度では先行きが見えてこないと思います。やはり正面から素直な態度で臨むことが大事だと思います。

その次に感じたことは、人間一生が勉強の連続であるということ。情報過多の時代、多様化の時代、ライフサイクルの変化が早い時代に、常にアンテナを張り、情報をより早くキャッチし、時代の流れを的確に把握し、今後のコンセプトを確立することが必要だと思います。そして今後の書店としての進む道を決定し、読者に愛され支持され信頼される店づくりをするために、私達は、休むことなくいろいろなことを学んでいかなければならないと思います。

この様な観点からすると、書店という場は一番情報を得ることができ、「本」という情報の宝庫にいつも接している恵まれた存在です。「本屋の本読まず。」ではなく、その恵まれた環境を最大限生かして、勉強していかなければならないと思いました。

以上のように今回の研修では、本当にいろいろなことを学ぶことができました。このように文章にまとめてみますと、非常に基本的なことばかりのように思います。このような基本的なまた原則的なことは、いまさらとお考えの方も多いと思いますが、しかしこの基本的なことさえも、現状の私どもの業界ではできていないのではな

いでしょうか。

一番最初にも言いましたように、今この出版業界は、消費税導入という大きな嵐の中に立っています。この業界の中でも、いろいろな考え方、いろいろな物ごとへの判断の仕方があると思います。しかしそのような中でも、消費税導入という問題を考えるときに、いつでも念頭におかなければならないのは、何度も言うことですがやはりお客様Ⅱ読者（一部の片寄った読者という意味でなく、本というものに接するいろいろな人々という意味で）ということです。もう一度原点に返って、業界としてのいろいろな対応が、読者にとってプラスになるのかどうかということを考えることが、いろいろな結果を導くための一つの基準になるのではないかと思います。読者を混乱させるような方針や再販制度を崩壊させるような対応、そして流通を混乱させるような決定は、決してお客様にとってプラスになりません。

また「本」というものも、一度商品として世に送り出されれば、他の物品と同じであることは当然のこととし

て、その反面、再販制度に守られた「特殊な商品」であるということも充分認識しなければならないと思います。さらに、流通の問題から言えば、その過程に「ルール」というものが存在することも忘れてはならないと思います。

出版物といういろいろな要素、様々な傾向、多種多様の論理が混在する世界で、それを読者へスムーズに届けるには、やはり一定のルールを守らなければならないのは当然だと思います。言論・表現・出版の自由の権利は、一番大切なことですが、それに対する義務および責任も当然忘れてはいけないと思います。読者の支持を失わないためにも、一社一社、一業種一業種のことだけを考えるのではなく、出版社・取次店・書店・読者というこの出版業界全体の流れとコンセプトを考えて、今後の問題に取り組んでいただきたい考えます。今後とも、いろいろなお客様Ⅱ読者に支持されるような店づくりを目指して頑張ります。

会長退任のご挨拶

東京大学出版会

中平 千三郎

今年平成元年一月二七日、人文会二十周年記念事業終了後の新年会におきまして、会員の各位に会長辞任を正式に申し上げました。二つの理由をあげました。一つは、この二月二十日で満六十五歳となり、東京大学出版会でも、昨年の七月からは常任顧問から顧問になって、実務の第一線から完全に引退したので、現役の営業責任者集団である人文会の会長はつとまらないということ。二つには、二十周年を迎えた人文会が今後更に発展するためには、成人にふさわしい衣装をまとうこと、つまり人事の刷新が必要であるということです。

さきに、昭和五十二年、人文会十周年の前に代表幹事を辞任いたしました。組織の活性化のためには、人事の刷新が必要と思ったからです。どうにか辞任は承認されたものの、それまで会則になかった会長職を設けることになり、その初代会長に推されました。いは

ば人文会から小生が離脱することをとどめるための措置で、人文会にとって小生の存在が必要だということだったのでしょう。当時も書協の理事をつとめており、梓会、法経会その他の人文社会科学系の専門出版社の連絡係といったような役割もあったのでしょう。そのため会長職をお受けした次第です。その後会長としては例会に対する出席義務もないので、年一回の年末懇親会に出るのが精一杯で、ほとんど実務に関係しませんでした。せめて総会位は出るべきだったかと反省いたしております。

いつの間にか二十周年を迎えるにいたり、ご来賓多数をお迎えしての記念祝賀会を昨年十二月開催いたしましたので、会長として二十周年の御礼のご挨拶を申し上げ、今後のご支援をお願いいたしました。この時、これからの人文会のためには、この会の前に会長を辞任すべきだったと、強く意識いたしましたので、あけて新年会の席上辞意を申し上げますのです。

この程、人文会の総会において会長辞任が承認されたよし、相田代表幹事から承り、やっ
と肩の荷がおりた感をいたしております。

退任にあたり、所感の一端を申し上げ、多年の御厚誼に深謝いたしますとともに、今後とも人文会の発展に一層のご支援をたまわりますようお願い申し上げます、ご挨拶いたします。

人文会会員名簿

(〒113 文京区本郷 5-32-21 みすず書房内)

1989. 6. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町 1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	平石 修	102	千代田区九段北 1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	439-0125	439-1094
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	814-6861	814-6854
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	813-8105	813-9061
幹 事	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	255-9611	253-1384
	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	255-4501	255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	946-5666	945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	269-1051	269-1092
	筑 摩 書 房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町 2-8	291-7651	295-0220
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1	811-8814	812-6958
	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	987-8621	987-8590
	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	813-3981	818-2786
幹 事	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 Kビル	265-0455	263-9333
幹 事	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	814-0131	818-6435
	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	814-5521	814-8600
幹 事	雄 山 閣 出 版	武 一雄	162	新宿区白銀町 20	266-8481	266-8444
幹 事	有 斐 閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	265-6811	262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎辻村 ○重光 氏家 渡辺 菅田 西谷 阿部

弘 報 委 員 会 ◎澤畑 ○土屋 古川 平石 萬洲 竹内

調査・研修委員会 ◎市川 ○原田 佐久間 濱地 菊池

◎印は委員長 ○印は副委員長

[ピート・ハミル] イラショナル Irrational Ravings レイビングス

沢田 博◎訳／川本三郎◎解説

ベトナム戦争やカウンター・カルチャーが吹き荒れ、アメリカが激しく燃えた60年代——

ジャーナリストの最前線にいたピート・ハミルがあふれる愛情とこみあげる怒りを込めて送ったホットなコラム集を今、日本で初めて公開する。
¥2000 (税別)

青木書店

東京神田神保町1-60 03-292-0481

《森林社会学》 宣言

◎森と社会の共生を求めて◎

内山 節編 四六判カバー付 定価1648円

森林への関心が高まりつつあるいま、森林を社会的存在としてとらえ、新しい《森林の思想》の確立をめざす。13人の研究者が書いた話題の本。

文の文化と 武の文化

◎隣の国の同と異◎

韓 準石著 四六判カバー付 定価1545円

狭い海峡の向こうの若々しい国・韓国。その国の力と心とを正しく知るための待望の書。文・武という言葉の鍵として分析し、誤解にみちた韓国像を正す。

東京・神田
神保町



有斐閣 03/265
-6811

言語的 コミュニケーションと 労働の弁証法

尾関周二著

46判(税込)
予3100円

6月下旬発売、人間起源論、人間本性論、疎外論、認識などをとおして、人間と自然、人間と人間の基本的関係を媒介する《労働》と《言語的コミュニケーション》の区別と内的連関を見事に解明した意欲的労作

現代社会と人間観の基本問題を解明

大月書店

東京都文京区本郷2-11-9
電話03-813-4651<代>

絶賛発売中

権原考古学研究所編 昭和六十年朱塗の石棺、類例のない豪華な馬具発見の第一次調査、同六十三年フアイバースコープによる第二次調査、つづく開棺によつて数多くの華麗な副葬品を見た第三次調査、その全容を収録する。A4判/定価一八〇〇円(税込)

鮮明なカラー写真と豊富な図版で再現する
詳細な初の公式報告!

斑鳩 藤ノ木古墳
概報

一四〇〇年の眠りから覚めたタイムカプセル。

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2・電話03-813-9151

異 孝之 サイバーパンク・アメリカ

人間とコンピュータの接続を実験する電脳文学の世界。1751円＋税260

春日キスヨ 父子家庭を生きる

男と親の間 子育てを通して男らしさの神話をうつ。1751円＋税260

第3回ノンフィクション「朝日ジャーナル」大賞受賞作品!

沢田欣子 ブラウンハット

オーストラリアの大型米づくり合理的生産方法をルポ。1751円＋税260

大谷愛人 キルケゴール 著作活動の研究 (前篇)

青年時代を中心に行われた文学研究の実態を解明する。14420円＋税410

* 定価は消費税込みです。

東京文京 後楽2-23 勁草書房 振替東京 5-175253

綿と木綿の歴史

武部善人著(大阪府立大学名誉教授)/新刊・4500円
衣料革命と産業革命の担い手としての綿と木綿の観点から、長年の研究蓄積を貴重な図版150枚を紹介しつつ集大成した産業史



環境問題の社会理論

—生活環境主義の立場から—

鳥越皓之編/四六判・1800円

琵琶湖のフィールド・ワークから生まれた環境問題への生活の立場からの理論的提言

* 表示価格は消費税抜きです

御茶の水書房

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2
電話03(265)5746/FAX03(265)17767

最大規模の疑獄事件の真相を追う!
リクルート疑惑の構造
佐高信著
王国／政財界腐敗の構造……リクルート事件の構造と本質を徹底追究! 定価一〇〇〇円

コシヒカリ物語
読売新聞社
新渥支局著
定価一五〇〇円

国内外の圧力に揺れる農家の「現場」からのホットレポート!

社会思想社

東京都文京区本郷3-25-13 ☎813-8105

光と影ろい

日本精神史における理念の形態

藤田健治 神話、平安期の文芸、鎌倉期の仏教、江戸期の儒学や国学などを中心に検討する ■2240円(税込)

知識と想像の起源

プロノフスキー 様々な分野で活躍し「ルネサンス的人間」と称された著者の哲学の集大成 ■2500円(税抜)

心は脳を超える

人間存在の不思議

エックルス、他 著名な脳生理学者らが、心と脳の根本問題に挑み、人間の本质に鋭く迫る ■2300円(税抜)

J. ローレンス
待望の復刊/正義論 6500円(税抜)

紀伊國屋書店

本店:東京都新宿区新宿3 ☎(354)0131
出版部:東京都世田谷区桜丘5 ☎(439)0125

ヴィジュアル・イリュージョン

芸術と心理学の融合

N. ウェイド／近藤倫明他訳 視覚心理学者であり、オップ・アーティストでもある著者が著した楽しいデモンストレーション集。付録つき。予価5800円(税込)

アレクサンダー・テクニーク

姿勢が変わる・からだが変わる・生き方が変わる

W. パーロウ／伊東 博訳 頭、頸、脊椎など「からだの使い方」を調整することによって、健康に有害な緊張の習慣を取り除く新しい技法。2600円(税込)

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-946-5666

伴侶の死

■加藤恭子 夫とはどんな人だったのか。突然の死によって一変してしまつた世界から再び回復するまでの感動の記録。1800円

おだやかな死

心暖かな介護のために

■カラーリ／重兼芳子・森文彦訳 死に直面した人に何がしてあげられるか? キュブラー=ロス・ホスピスの元看護婦長が語る。1350円

▶定価は消費税込みです

東京都千代田区外神田2-18-6 春秋社 (03)255-9611 振替東京8-24861

森省二+氏原寛 名作童話の深層

白雪姫・イワンの馬鹿・銀河鉄道の夜・かぐや姫・幸福な王子…童話の豊饒な心的世界を浮き彫りにする!

定価=1400円

ヴェレーナ・カースト著

おとぎ話にみる 家族の深層

ユング心理学選書⑦ 定価=1650円

森省二著

アンデルセン 童話の深層

定価=1300円(税別)

創元社

大阪市北区西天満1-4-2 ☎06-363-2531
東京都新宿区山吹町334-11 ☎03-269-1051

ラスキン

クエンティン・ベル 出淵敬子訳 美術批評家。地質学者。社会思想家。詩人——。20世紀社会の礎となったラスキンの壮大な思索に、作品を読み解きつつ迫る刺激的な評伝。1960円(税込)

フランス六人組

20年代の音楽家群像

E・ユラール=ヴィルタール 飛幡祐規訳 ダリウス・ミヨーをはじめとする若き作曲家たちの芸芸術的活動を、サティ、コクトー、ピカソらとの多彩な関わりの中に再現。4300円(税込)

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255) 4501

新鮮な歴史のイメージを引き出す ●全7巻

古文書の語る日本史

監修 児玉幸多 各時代の諸相をえぐるさまざまな古文書を丁寧に読み解く、新しい発想の日本通史。新鮮な歴史像を推理する楽しみに満ちた新シリーズ。

●第1回好評発売中 3300円 (税込)
5戦国・織豊 峰岸純夫編
続刊 ①飛鳥・奈良 ②平安 ③鎌倉 ④南北朝・室町 ⑤江戸前期 ⑥江戸後期

筑摩書房

東京神田

小川町2

〈癒し〉のまなざし

中川米造対談集

患者主体の医療を唱える著者が、各界のエキスパート10人と現代医療をめぐる徹底討論ノ四六判／定価一六四八円(本体一六〇〇円)

知覚工学

応用心理学講座 7

・大山正・秋田宗平編

知覚研究の応用を概観し、工学的発想の中にひそむ知覚要因をさぐる新しい方法の提唱。A5判／定価三九一四円(本体三八〇〇円)

東京・文京小石川1-3

福村出版

電話(03) 813-3981

LA LEVOLUTION FRANÇAISE

フランス革命

年代記

●6月下旬刊

予価3000円

J・ユデシヨ著

一七八七年から一七九九年までの革命の全過程を鳥瞰する年代記。世界的視野と地方の動きへの目配りをもって、経済・政治・思想・社会等の諸要因の交錯する革命を見事に画き出している。読み物としても面白い。



日本評論社

豊島区南大塚3-10-10/☎03-987-8611

なぜ日本人は働きすぎるのか

猪瀬直樹+信州大学客員講師団

●1,400円

労働時間はなぜ短縮できないのか。世界一長いといわれ、国際的な批判を浴びる日本人の労働を、ユニークな経歴をもつ社会人講師たちが徹底的に解剖し、未来への方策を探る。

日本人の仕事

●4,200円 鎌田慧

日本人の人生案内

編 読売新聞社婦人部 ●4,200円

日本人の戦争

編 朝日新聞ア・マ談話室 ●4,200円

平凡社

(すべて消費税が加算されます。) 102 東京都千代田区三番町5

非売品

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印